

# 序章 インド精神文化の土壌

——近代インド誕生の時代背景——

インド四千年の宗教哲学史は、その真理を体得具現した数多くの聖者、覚者の出現により、ヒマラヤ山脈の如き偉容を以て世界に臨んでいるが、そのなかで、ひとときわ高く聳える三大巨峰は、ゴータマ仏陀、<sup>ブツダ</sup> シャンカラ大師、<sup>アチャヤ</sup> ラーマクリシュナ大覚者である。

ブツダ（前五四九―四八六）は仏教の開祖として、シャンカラ（七八八―八二〇）は不二一元ヴェーダーンタ哲学の理論を完成した大哲学者として有名であるが、十九世紀に生涯を送ったラーマクリシュナ（一八三六―八六）の名は、今日インドにおいて三歳の幼児でも知っていて、インドの希望と慰安の象徴であるばかりでなく、彼の生涯によって起こされた波は東西両洋の岸を洗い、人類の霊的向上と世界平和に至る真実の道を、心ある人びとに語りかけているのである。

一七五七年、ブラッシーの戦いによって、英国がインドのベンガル地方一帯をその支配下に置いてから、一八五七年ムガル帝国が名実ともに滅亡し、続いてその翌年、東印度会社を解散して英国王による直接の統治開始に至るまでの約百年間は、インドが一途に英国の植民地化、奴隷化への経路をたどっていた時代である。

この間にはインド固有の精神文化に対する懐疑が生じ、自分たちの有した過去の文化は空想的夢想的なものにすぎず、ヨーロッパ人のような「優れた人種」に対して言うも恥ずかしい愚事

であるというような卑下感が、特に知識階級の間を広がった。英国勢力の及ぶ所、あたかも無人の境を行くが如く征服されるのを眼のあたり眺めては、自分たちの持つあらゆるものの価値を疑うようになったのも無理からぬことと思われる。

その結果、すべて西洋的なものは高尚であり採るべしとなり、インド的なものは卑賤であり捨つべしと考えられた。文学も、哲学も、また宗教においてすらヨーロッパ風なものを尊重し、自国のものを卑下したのであった。

知識階級の青年は英文学に走り、スペンサーの哲学を学び、これによって自国文化の向上を計り得るものと信じていた。もちろん、彼らとて英国人の奴隷であることを望んでいたわけではない。祖国の自由を欲していたのは当然のことだが、現に強力な英国人およびその国家に對抗できるようにするためには、これと等しくなることがまず必要であると痛感したからなのである。

この風潮は十九世紀末近くまで及んだが、この英国追随の風潮も個人的ないし利己的動機から発したのではなく、やはり国民としての進歩を念願したものであったから、その苦悶と努力の真っ只中から、純粹な民族運動に至る気運が徐々に醸かされていったのである。ことに一八六〇―九〇年の約三十年間は、精神生活の上にも日常生活の上にも著しい変革が行なわれたので、近代インドの誕生期といわれている。

この意味で、インドにとって十九世紀は、一面においては奴隷化の時代であったとともに、二十世紀に至ってにわかに表面化した民族自覚運動の、精神的準備がなされつつあった意義深い潜伏期だったと見なければならぬ。

この精神運動は、はじめは英国文化に対する追隨、続いて、自国にも多少は外国人に示し得る文化財のあることを発見する。次に、それら過去の所産の中から外国人に見せても恥ずかしくない部分のみを残し、外国人が軽蔑するような要素を除去して、ヨーロッパ人の標準において立派な文化を構成しようという努力がなされた。たとえば、女性の社会的劣位、幼年結婚、偶像崇拜、多神教、輪廻思想など——これらは皆、西洋人の好まないところであるから廃棄すべきであるというのは、この傾向の現れである。

しかしまた、別の方面においては、インド固有の文化の中にもみ真理があるという国粹的傾向も生じたが、その主張者ですら、インド古代文化の中には、西洋人が貴ぶようなものがあるから、その故にこれを尊重すべきである、というが如き高下の標準をあくまでも西洋人の立場に置こうとする傾向が多分にあった。とにかく、さまざまな問題についてさまざまな立場から意見が提出され、実行され、哲学、宗教、文学、芸術、科学などあらゆる方面において真摯な努力が続けられた。

これらはいずれも民族意識の顕著な表現であるが、インド人の生活態度から考えて、その



デベン德拉ナート・タゴール

重大関心事が宗教であることは昔も今も変わりがない。歴史をふりかえっても、インドにおいて偉大な時代の訪れはいつもまず宗教からであった。十九世紀後半の精神運動においても、その例外ではない。

十九世紀におけるインドの新宗教運動の先駆をなすものは、一八二八年に「近代インドの父」とよばれている偉人、ラム・モハン・ロイの創立したブラーフマ・サマージ（梵協会）である。これはその後、詩聖タゴールの父、デベン德拉ナート・タゴール（一八一七—一九〇五）と、

ケーシャブ・チャンドラ・セン（一八三八—一八四）の指導のもとに発展し、かつ分化した。地域はカルカッタを中心とするベンガル地方に限られていて、会員の数もさして多くはなかったが、知識階級に及ぼした影響は実に甚大なものがあつた。

三派に分裂したが、神性の統一を信じ、人類同胞の思想を有し、媒介者なしに直接神と交渉を持ち得ると考えることは、そのすべ

てに共通である。その一つは、アーディ・サマージ（本源協会）といって、最も保守的である。あらゆる偶像の形式を放棄しながらも、しかもできるだけ厳密にヒンドゥー教の儀礼にしたがい、思想の淵源をただヒンドゥーの宗教書、特にウパニシャッドに求め、他宗教の教義は一切とりいれない。バラモンでない者を理事にしたことはただ一度だけしかないという点から見ても、その保守主義の程度を知ることができよう。

その第二の派は、一八八一年にケーシャブ・センが新たに設立したナバビダーン・サマージ（新摂理協会）である。これは彼が親しく交際していたラーマクリシュナの影響が多分にあるといわれていて、その教義もヒンドゥー教の聖典のみならず、キリスト教、仏教、イスラム教のなかからも採るべきものは採用している。

第三のサーダーラン・サマージ（普遍協会）は、ヒンドゥー教の主要要素を放棄し、礼拝の紋切型を非難し、カースト制度を無視し、婦人に対する差別をできるだけ除いて自由な教育を与えるようにすすめた。少なくとも会の内部では男女同権を認め、もちろん異なったカースト間の結婚も自由である。だから西洋風の教育を受けた青年たちは、カーストの束縛や事毎に浄めきよめの儀式を行わねばならない煩勞はんろうを嫌う理由から、この会に走るものも少なくなかった。

このようにブラーフマ・サマージの活動は、信仰と社会改革との二方面を含んでいるが、三派すべてを通じて常にキリスト教の立場を考慮にしていることは争えない事実である。会の

創立者ラム・モハン・ロイがキリスト教とイスラム教の神学を深く学び、ヒンドゥー教を救つてこれをキリスト教の宣教師または無神論者の批評に堪えうるものとするには、ヒンドゥー教の如何なる点を修正補訂すべきか、ということを常に考えていたのであるから、アーデイ・サマージのような最も保守的な派においてさえ、キリスト教と無神論とに対する弁明を常に念頭においていたことは疑えない事実である。

ラム・モハン・ロイはウパニシャッド的な信念を敷衍するのかえにプロテスタント・ユニテリアニズムから自由に借用した。ケーシャブ・センにいたつては、信仰の中心にさえキリスト教的理想を入れた。社会改革の目標は全く欧米に範を採つたことは言うまでもない。

しかしこのブラーフマ・サマージが誕生し活躍した時期を考えると、この会の存在は全く意義深いものであった。政治的に侵略され弱体化したインド国民が、その生活基底である自国の文化にも自信を失つた時にあたつて、古来の信仰を何らかの形で保持しようとするれば、少なくともこれに欧米風の外被を着せることが、その時代としては絶対に必要なであつた。

この動揺期にあつて、数千のインドの青年知識階級を、無神論ないしキリスト教の手から救つたとするならば、この会の目的は十分に達せられたと言つてよい。まして、いったんは放棄しようとした自国の古代文化の中に、世界に誇るべきものがあることを自覚し、ひいてはその復興を促す気運を醸かしたことは、何といつてもこの会の功績と見なければならぬ。

本書の主人公ラーマクリシュナを世に出したのはケーシヤブ・センであり、ラーマクリシュナの有力な信者たちは、ほとんどブラーフマ・サマージの会員であった。後にラーマクリシュナの後継者となり、師の教えを世界に宣布したヴィヴェーカーナンダも、もとはケーシヤブ門下の一青年だったのである。そして彼の欧米における大成功がインド人の自信を呼びさまし、独立運動の精神的バックボーンとなつて行くのである。

当時の主都カルカッタを中心とするベンガル地方ではブラーフマ・サマージが一世を風靡し、あらゆる宗教の一致協力を提唱していたが、一方、インドの他の側、即ちボンベイを中心とする地方では、国粹保存を主張する新宗教運動が起こつた。グジャラート州出身のバラモンの学者、ダヤーナンダ・サラスワティ（一八二四―一八八三）が、一八七五年にボンベイで創設し、後にラホールに根拠を移したアーリヤ・サマージがそれである。純粹のインド人——インダス河とガンジス河の両流域を征服した偉大なるアーリヤ民族の結社というわけである。

ダヤーナンダ自身は博識なヴェーダ学者であり、純インド的な論師だった。彼は「ヴェーダに帰れ」の標語のもと、西洋的なものはすべて排斥し、キリスト教にも劣等感などは毛ほども持たず、ヒンドゥー教に対する宣教師の攻撃に答えて、キリスト教に正面から鉄槌を下した。もちろんイスラム教をも攻撃する。そればかりかヒンドゥー教内における後世の付加物——



つまり、ヴェーダ本集に載っていない教義や礼拝形式を除去することに努めた。

その理由からカースト制度や不可触賤民制の廃止を主張し、ヴェーダに対するバラモンの独占を否認し、ヴェーダを俗語に訳して注釈し、サンスクリットを知らない人でも容易に学べるようにもした。また町や村に学校をつくって教育の普及をはかり、これまでほとんど行なわれていなかった女子教育に力を注いで、婦人を社会的無力の数々から解放した。博愛事業と教育の普及が、この会の著しい特徴の一つとなっている。

アーリヤ・サマージが、その独得な解釈によるヴェーダのみに固執することは明らかに偏狭ではあるが、しかし、この運動が一般インド人に及ぼした影響は甚大である。ブラーフマ・サマージの影響がほとんど知識階級のみに限られていたのに比べ、アーリヤ・サマージの主張は多くの階層の人びとの心を動かし、ダヤーナンダの死後もますます発展して、上は王族から下は不可触賤民に至るまでの幅広い支持者を獲得した。この会は一面において固陋ころうのそしりは免れないとはいえ、外国文化の侵入に抗してヒンドゥー文化の復興をはかり、民族と時代の要求をかなり満たすことができたことは、大いなる功績として特筆すべきであろう。

また、西洋人によって起こされた宗教運動として、テオソフィカル・ソサイティ（神智協会）がある。これはブラヴァツキー夫人とオルコット大佐が一八七八年頃からボンベイに来て活動を開始したもので、インド的要素を多分にとり入れ、ヒンドゥー教および仏教と提携しようと

し、インド各地を遊説して信者を集め、欧米においても神秘思想に興味をもつ人びとの関心を  
かち得た。この運動が実際どれほどインド本来の宗教思想の流れを汲んでいるかは疑問である  
が、とにかく、ある意味で、近代の無神論とキリスト教の無造作な侵入を防止するのに多少の  
貢献をしたことは、争えない事実である。

たとえば、マハトマ・ガンジも英国滞在中にブラヴァツキー夫人の著書を読んだのが機縁  
になって、ヒンドゥー教の書物に親しむようになった。それまではキリスト教の宣教師の言を  
軽信して、ヒンドゥー教には迷信が多すぎると考えて、あまり近づかなかつたのである。ただ  
し、この会は社会改革には立ち至らず、その影響も前述の二つの運動に比べて問題にならなかつ  
たが、インド南部では一時かなりの会員を集めることができた。

このように種々の新宗教運動が出現したことは、インド国民がそこに何かあるものを求めて  
いた証拠であるが、これらを通じてなお一つの根本的欠陥が感じられる。それは、これらの  
指導者がいずれも理論から出発していることである。ラム・モハン・ロイにせよ、ダヤーナンダ  
にせよ、ケーシャブ・センにせよ、宗教家として偉大な人物にはちがいないが、すべて理論が  
先に立ち、その説く所においてもややもすれば実践が従属的となつてゐる。ところが、真の  
ヒンドゥーの精神においては、宗教とは「悟りを開く」こと、「真理を体得する」ことなのである。  
したがって宗教を説く者は、道理をわきまえてゐる人というよりも、真理を体験してゐる人

なければならぬ。神の存在を論証するよりも、神を感得する人でなければならぬ。

インドでは、真理を肉体に具現し、神を知覚的に把握する人のみが真の宗教家である。少なくともインド人はその歴史上の大宗家を、すべてかくの如きものであると見なしてきた。そのような聖者に対しては、インド人は無条件で礼拝する。理論的説明を聞くためではない、ただその衣の裾に触れ、その温容に一目接するため、千里の道も遠しとせず人びとは集まってくるのである。

「思想が持つ力を理解しているものは数少ない。もしある人が洞穴に入って閉じこもり、そして真に偉大な思想を考えた後、そこで死んだとする。しかし、その思想は洞穴の壁から滲み出し、空間を振動し、遂には全人類に充滿するだろう。思想の力とはこういうものだ。蓮の花が開いたら、呼ばなくとも蜜蜂は自然に集まってくる」

これはラーマクリシュナが若い弟子たちにも言ってきた言葉であるが、ラーマクリシュナはたしかにそのような思想家であった。前に紹介した宗教指導者たちとちがって、貧しいバラモンの子に生まれたこの人は、自称「無学文盲」で、自分の名さえ満足に書けなかったが、住まいするカルカッタ郊外の寺の一角には、一八七五年ころからインド社会のあらゆる階層、宗派の人びと、イスラム教徒やキリスト教徒までが、話を聞きに来た。ブラーフマ、

サマージに属する最も優れた知識人たち、学者、科学者、医者、芸術家たちが、田舎なまりのベンガル語で話すこの人の話に魂を奪われたようになって聞き惚れたのである。

その宗教思想はインド四千年の精神文化の精華であり、前述の、一の弟子ヴィヴェーカーナンダによって欧米に紹介され大反響を呼んだ。二十世紀のインドは、詩聖タゴール、ガンジー、ネルーなど世界的大人物を生んだが、この三人が口を揃えて讃仰し、帰依したのが、ラーマクリシュナとヴィヴェーカーナンダであった。

大宗教家の伝記は、歴史的研究家にとってははなはだ厄介である。ことにインドの場合は、その事蹟の中で、純粹に歴史的な部分を、伝説的な部分と切り離して考えることはまず不可能である。が、幸いなことにラーマクリシュナの場合は、時代が近く、また当時のカルカッタはアジアで最も近代化された都会で、知識人の間には西欧の合理主義的思想が充満していた関係で、彼らがラーマクリシュナに会って、その様子や感想などを新聞や雑誌に発表したり、自分の心おぼえに書きしるしておいた資料が数多く残っている。また写真もかなりとってある。ことに、晩年の五年間にわたる言行録が、速記録ともいってよいほどの正確さで残っている。

弟子の一人、マヘンドラ・グプタ校長が筆録した『不滅の言葉』<sup>コタムリット</sup>（五卷二千ページ）が、それである。大覚者の日常が事こまかに描写しており、信者や弟子たちとの会話の中では、幼時や修行時代の思い出話を、本人自ら何度となく語っている。彼は壇上から説教したこともなく、大学

で講義したわけでもない。『ラーマクリシュナの言葉』として各国語に訳されているのは皆この会話の中から抜粋したものである。こうした資料が多くあるので、インドでは仏陀、キリストと同等に尊崇されて、その思想たるや、現代に至って最も有益である大覚者の一生を、ほぼ正確に伝えることができるのである。